

津大豆ニュース 令和4年産作柄報告版

令和5年3月30日

津地域農業改良普及センター

TEL:059-223-5103

1 概要

(1) 生育経過（7月下旬中心に播種され、生育量は確保できた）

播種作業は、早いところで7月初めから開始され、8月上旬に播種が完了となりました。播種時期は概ね平年並みとなりました。7月初めにまとまった降雨があり、7月の早い時期に播種したほ場では出芽不良が見られました。その後、定期的な降雨はありましたが、大雨はなく、苗立ちが確保できたほ場では、初期生育は良好となりました。

8月は降雨が多く、中耕培土は8月下旬の限られた日にしか行うことができませんでした。適期に作業できたところでは、生育量を確保することができました。開花は7月下旬播きで9月上旬となりました。落葉は11月初めから始まり、成熟期は11月下旬頃となりました。

(2) 収量・品質（昨年度より減収し、過去数年でも低いレベル）

7月下旬までに播種されたところでは、節数、分枝数がまらず確保され、着莢数は平年並みとなりました。収量は、栽培条件や栽培管理による生産者間での差が大きくなりました。昨年度より減収した生産者がほとんどとなり、管内の平均単収は51kg/10a(昨年度85kg/10a)と低単収となりました。過去5年と比較しても低い年となっています。8月から10月上旬にかけて降雨が多く、日照が不足したことで小粒傾向となり、また、カメムシによる青立ちが多く被害粒が目立ちました。1等比率は37%と昨年の47%より低くなりました。

(3) 病害虫（吸汁性カメムシ類が昨年に続き多発）

ハスモンヨトウによる白変葉が散見されましたが、多発したほ場はありませんでした。一方、カメムシ類の発生が昨年に続き目立ちましたが、適期に防除されたところでは被害を抑えることができました。しかし、防除が不十分などところでは青立ちが多く、減収や品質低下の要因となりました。

2 次作以降の対策

(1) 適期播種

フクユタカの播種適期は7月上中旬です。早めの準備を心がけて、適期に播種作業を行いましょう。麦収穫後、すみやかに明渠の修繕を行い、雨水が停滞しないよう排水対策に努めましょう。近年、7月に雨が続いて適期に播種ができないことが多いため、晴れ間を見て作業できるように準備を進めましょう。

(2) 播き遅れ対策

播種時期が7月下旬以降となる場合は、播種量を2割程度増やしましょう。条間を40cm程度の狭畦にして播くか、株間をできるだけ狭くして播種量を増やしましょう。

注意：狭畦播種すると中耕培土ができないため、除草剤での雑草防除が主となります。

播種後の土壌処理剤と雑草発生後の茎葉処理剤により防除を徹底しましょう。

(3) 土壌診断、土づくり

土壌診断を播種前（できれば麦立毛中）に実施し、酸度矯正や不足する養分を補うため、土壌改良材等を施用しましょう。

また、麦稈の鋤込みによる窒素飢餓を回避するため、石灰窒素を10a当たり10～15kg施用すると有効です。

(4) 病虫害対策

ミナミアオカメムシ等の吸汁性カメムシ類の発生が増加しています。吸汁性カメムシ類は大豆の子実を吸汁し、未熟粒の発生や不稔莢等の原因となります。防除は開花後20日(莢伸長期)と開花後40日(子実肥大中期)の2回実施しましょう。(7月上中旬に播種したところでは9月中旬と10月上旬、7月下旬播種のところでは9月下旬と10月中旬頃が目安)

(5) 中耕培土

中耕培土作業の有無が大豆の生育に影響します。土壌の通気性を良くし、根粒の着生を促すとともに雑草防除の効果もあります。狭畦栽培の場合を除いて、播種後20日から40日位の間には1～2回実施しましょう。

(6) 雑草管理

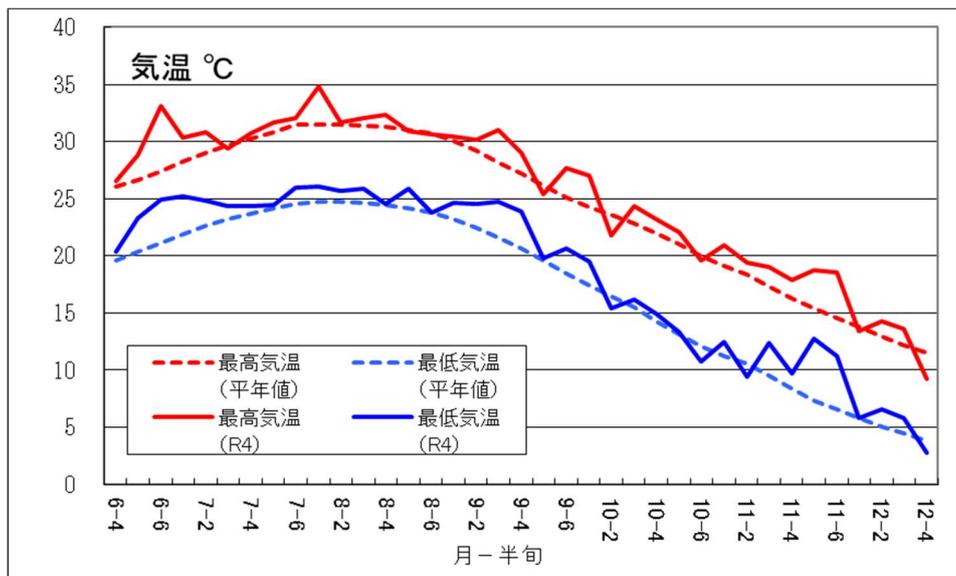
帰化アサガオ類、ホオズキ類等の強害雑草の発生が一部ほ場で見うけられます。茎葉処理除草剤の適期散布や中耕により、雑草の発生・生育を抑えま

しょう。また、生育ステージ後半まで残ってしまった雑草については、収穫までに手で抜き取り、抜き取った雑草は、畔やほ場内に放置せず処分しましょう。

3 参考資料

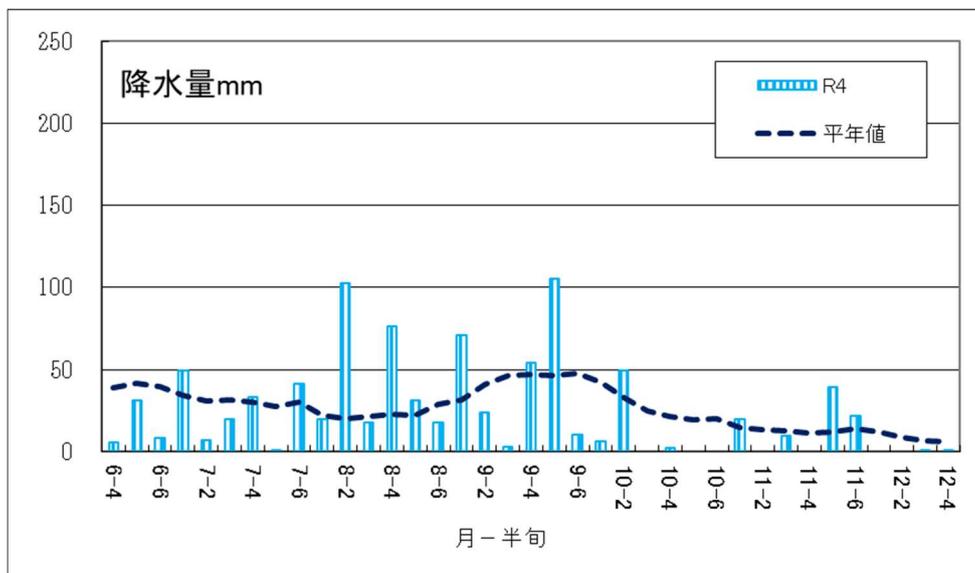
(1) 気温

10月上旬に平年より気温が低い日がありましたが、生育期間を通して気温が高く、秋の訪れは遅くなりました。



(2) 降水量

6月から7月中旬にかけて降水量が少なく、7月下旬から9月にかけて継続して降雨がありました。10月以降は晴れの日が多く降水量は少なくなりました。



(3) 日照時間

6月から7月下旬にかけて晴天が多く日照時間が多くなりました。8月から9月上旬は降雨が多く日照時間がかなり少なくなりましたが、10月以降は晴天が多く平年に比べ多い日照時間となりました。

